

# 「古典B」教科書教材における 「伝統的な言語文化の学習」のための「教材群観」 —近世俳諧関連教材を中心に—

仁 野 平 智 明

## はじめに

平成20年版学習指導要領の改訂により、国語科に「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設され、高等学校国語科に、従来の「古典講読」「古典」の内容を改善したものとして「古典A」「古典B」が開設された。同解説によれば、両者ともに、「小学校、中学校及び「国語総合」の指導との一貫性を図りながら、伝統的な言語文化に関する課題を設定して探究したり」（「古典A」「1性格」）、または「小学校、中学校及び「国語総合」と一貫して育成してきた古典への関心を一層深め、それによって自己の内面を見つめ発展させ、人生をより豊かにしていこうとする態度を育成する」（「古典B」「2目標」）というように、小学校から「国語総合」までの「伝統的な言語文化の学習」を一貫性のもとに引き継ぎ、かつ深化させる目的を与えられた科目である。本稿は、「伝統的な言語文化の学習」の教科書教材への反映について、現行の「古典B」教科書所収の近世俳諧関連教材<sup>1</sup>を調査し、それらの現状と課題について考察することを目的とする。

なお、近世俳諧関連教材を対象としたのは、現行の教科書において、小学校3年から中学校、「国語総合」を通じて繰り返し学習する教材<sup>2</sup>であるため、「伝統的な言語文化の学習」としての一貫性の検証に好適であり、かつ、「古典B」教科書教材に限定したのは、現行の「古典A」教科書にはほぼ掲載がない<sup>3</sup>のに対して、「古典B」教科書の全てが近世俳諧関連教材を取り扱っているためである。また、比較対象の便宜上、「古典B」教科書の出版元10社にA～Jの記号を付し、同一出版元の教科書が複数ある場合、A1・A2のように付属する数字によって区別し、「古典B」教科書全19種を、A1・A2・B1・B2・C1・C2・D1・D2・D3・E・F1・F2・G・H・I1・I2・I3・J1・J2と表記する。

## 1. 俳諧関連教材の種類と分布

現行の「古典B」教科書所収の俳諧関連教材<sup>4</sup>の分布について、教材の文学形式及び出典別に教科書ごとに分類し、〈表1〉に示した。各教科書の列は、上から教材数の多

〈表1〉「古典B」教科書における近世俳諧関連教材の分布

	韻 文			散 文										その他	教材数			
	発 句		連句	去来抄						三冊子	奥の細道	野ざらし侍	窓の小文			紫門の碑	おらが聲	
	芭蕉・蕪村・一茶	複数名		終数	行く春を	岩屋や	うづはら	発句論	下京や									此木戸や
A2	芭⑩		20		○	○	○				2		○	○			2	11
	蕪⑩																	
H	芭④ 蕪④ 一④		12		○	○					○		○				○	2
G		12人各①	12		○	○					○	3						7
D1	芭⑧ 蕪④ 一④		16	○	○	○					○			○				5
F1	芭⑧ 蕪⑦ 一⑤		20		○	○	○				○							5
I1		16人各①	16		○				○	○							○	5
I2		16人各①	16		○				○	○							○	5
B1		10人(芭・蕪・一各④、他各①)	19		○	○									○			4
B2		10人(芭・蕪・一各④、他各①)	19		○	○								○				4
E		13人(芭・蕪・一各②、他各①)	16		○	○					○							4
J1	芭⑤ 蕪⑥ 一⑤		16	○	○											○		4
J2	芭⑤ 蕪⑥ 一⑤		16	○	○											○		4
A1			0									4						4
C1	芭⑥ 蕪⑤ 一④		15		○	○					○							4
D3	奥8ヶ所 平泉②、 他各①(うち會良②)		9		○												1	3
	芭④ 蕪④ 一④																	
C2	奥12ヶ所各① (うち會良①)		24							○								3
D2	芭⑧ 蕪④ 一④		16								○							2
F2	芭⑥ 蕪⑥ 一④		16			○							○					2
I3		16人各①	16															

い順に並べ、発句・連句・俳文・その他に分け、発句は採録句の作者によって、「芭蕉・蕪村・一茶」とこの三者以外の作者も含む「複数名」に、俳文のうち「去来抄」については採録箇所を章段ごとに細分化し<sup>5</sup>、他の俳文については複数の教科書に採録された出典にはそれぞれ欄を設け、採録箇所が異なる場合も、同欄に収めた。欄内の「○」は、当該教科書の教材数が1点であることを意味し、「三冊子」「おくのほそ道」には欄内に章段の数を、「その他」には当該教科書にのみ採録された教材の数を示している。なお、本稿における「教材数」は、俳文については、出典が同一であっても、採録が非連続的な複数箇所にあたる場合、各採録箇所を1点とみなし、発句については、採録句数に関わらず、ひとまとまりの教材として配列される場合、1点とみなす。

以下に、〈表1〉について、各教材における採録状況の詳細を示す。まず、発句教材のうち、「芭蕉・蕪村・一茶」の欄には、松尾芭蕉・与謝蕪村・小林一茶の三者いずれかの句に限定して採録したものについて、芭蕉を「芭」、蕪村を「蕪」、一茶を「一」と

表記し、その横に丸付数字で各作者の句数を示している。そのうち、「奥」は「おくのほそ道」の句<sup>6</sup>のみの抜粋を意味する。一方、「複数名」の欄には、上記の三者以外にも複数名の作者による句を採録したものについて、1名1句ずつの場合は「各①」と表記し、芭蕉・蕪村・一茶の句数が複数にわたる場合はその旨を併記している。連句教材は3点とも、「猿蓑」所収の通称「市中の巻」の抜粋であるが、D<sub>1</sub>では冒頭の6句を、J<sub>1</sub>・J<sub>2</sub>では冒頭の6句と末尾の6句を採録している。なお、「その他」の教材名は、A<sub>2</sub>が「月夜の卯兵衛」と「歳末弁」（いずれも与謝蕪村の俳文）、Hが「北寿老仙をいたむ」（与謝蕪村の俳詩）、「鶉衣」（横井也有、「奈良団賛」の章段）、D<sub>3</sub>が「漁父の利」（小林一茶の句文集「株番」の俳文の一部）である。

また、俳文の出典は同一でも、教科書によって採録箇所異なる場合がある。「三冊子」は、8種中7種が「赤雙紙」の冒頭「師の風雅に、万代不易あり」から採録を始めているが、そのうち5種（A<sub>2</sub>・D<sub>1</sub>・D<sub>2</sub>・F<sub>1</sub>・H）は「皆かくのごとし」ともいへり」までであり、2種（C<sub>1</sub>・G）はさらにその直後の「師末期の枕に」から「いひ出でられし事度々なり」までをも採録しているのに対し、Eは、これら2種の採録箇所の直後である「「高く心を悟りて、俗に帰るべし」との教なり」から、「風友の中の名目とす」までである。また、A<sub>2</sub>はもう1箇所、「白雙紙」から「詩・歌・連・俳はともに風雅なり」から「即ち俳諧の誠なり」までを別章段として採録している。「おくのほそ道」は、A<sub>1</sub>は4箇所、Gは3箇所採録しているが、A<sub>1</sub>は冒頭の「月日は百代の過客にして」から「庵の柱に懸置」まで、次にその直後の「弥生も末の七日」から「見送なるべし」まで、立石寺を訪れた「山形領に」から「閑さや岩にしみ入蟬の声」まで、その少し後の「最上川はみちのくより出て」から「五月雨をあつめて早し最上川」までを、Gは白河の関の「心許なき日かず」から「卯の花をかざしに関の晴着かな 曾良」まで、「其夜飯塚にとまる」から「伊達の大木戸をこす」まで、最上の庄へと山を越えた「あるじの云」から「胸とゞろくのみ也」までをそれぞれ採録している。「野ざらし紀行」は、B<sub>2</sub>とHはともに冒頭の「千里に旅立て」から「汝が性のつたなきをなけ」までを採録するのにに対し、A<sub>2</sub>の末尾は「汝が性のつたなきをなけ」で同じであるが、採録の文頭は前者2種より短く、「富士川のほとりを行に」からであり、前者2種が「野ざらしを心に風のしむ身哉」を始めとする5句を含むのに対し、後者は「猿を聞人捨子に秋の風いかに」のみである。「笈の小文」はB<sub>1</sub>・D<sub>1</sub>はともに冒頭の「百骸九竅の中に」からであるが、D<sub>1</sub>が「閑送りせんともてなす」までを採録するのにに対し、B<sub>1</sub>は芭蕉の「旅人と我名よばれん初しぐれ」までとし、直後の「長太良」が「又山茶花を宿く<sup>7</sup>にして」という脇句を付けたところを省いている。また、A<sub>2</sub>は吉野への旅立ちの場面である「弥生半過る程」から「よし野にて我も見せふぞ檜の木笠 万菊丸」までを採録したのち、しばらく中略し、「よしのゝ花に三日」から「無興の事なり」までを採録しているが、この中略に関する言及は教材には見られない。「おらが春」は、H・I<sub>1</sub>・I<sub>2</sub>ともに「添乳」（仮題）の章段である「こぞの夏」から「蚤の迹かぞへながらに添乳哉」までを採録している。なお、「去来抄」の採録箇所については、表内表記の「行く春を」は「行

く春を近江の人とをしみけり」、「岩鼻や」は「岩鼻やここにもひとり月の客」、「うづくまる」は「うづくまる薬罐の下さむさ哉」、「此木戸や」は「此木戸や錠のさされて冬の月」、「下京や」は「下京や雪つむ上のよるの雨」の句を含む章段を意味する。「発句論」のみ例句がないため、教材の表記に依ったが、「修行」の部の第11段目「先師曰く「発句は頭より」から「論にあらず」までを採録している。また、「岩鼻や」の章段に関しては、採録箇所が3パターンに分かれ、『笈の小文』に書き入れける」となんの直後の「予が趣向は」から「感もあるにや」までと、その直後に大東急記念文庫蔵の去来筆稿本に書き込まれた頭書を付した部分「退いて考ふるに」から「知らざりけり」までの部分について、A<sub>2</sub>は「予が趣向は」から「感もあるにや」を省いて「退いて考ふるに」から「知らざりけり」までを採録し、B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・C<sub>1</sub>・Eは「予が趣向は」から「感もあるにや」までを採録し、「退いて考ふるに」から「知らざりけり」までの頭書部分を省き、F<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>・G・Hは全箇所を続けて採録している。

教材の分布上の特徴として、まず教材全体の構成要素から検証すると、教材数の最多はA<sub>2</sub>の11点で、最少はI<sub>3</sub>の1点であり、俳文教材の出典数でいえば、最多はA<sub>2</sub>・Hの6点である。発句教材は全19種中18種に含まれるのに対し、連句教材は3種である。また、俳文教材が全種に含まれることから、A<sub>1</sub>を除く18種には、〈発句教材+俳文教材〉という近世俳諧関連教材として韻文・散文の両方を備えた構成が共通することが分かる。発句教材の特徴としては、〈芭蕉・蕪村・一茶型〉が11種、〈複数名型〉が7種に分かれるが、〈複数名型〉のうちの3種は、上記三者のみ他の作者より句数が多いため、純然たる〈複数名型〉は4種であり、他の14種は芭蕉・蕪村・一茶の句に偏向した選句であるといえる。また、教材数はA<sub>2</sub>・C<sub>2</sub>に2点あるのを除き、15種が1点である。採録句数は、最多がC<sub>2</sub>の24句、最少がD<sub>3</sub>の9句であり、16句の教材が最も多く、9点ある。俳文教材の特徴としては、出典の最多は「去来抄」の16種であり、「三冊子」8種、「野ざらし紀行」「笈の小文」「おらが春」3種、「おくのほそ道」2種と続く。「去来抄」のうち、教材数の最多は3点で4種、2点は6種あり、単一箇所のみを教材化した6種よりも、複数名所の教材化の方が多い。採録箇所別に見ると、「行く春を」が14種で、かつ複数名所を教材化したものには必ずこの箇所が含まれていることから、「古典B」教科書所収の俳文教材において、最も一般的なものが「去来抄」の「行く春を」の箇所であるといえる。次は「岩鼻や」の9種で、「行く春を」と「岩鼻や」の両箇所を含むのは8種に及ぶ。あとは「うづくまる」「下京や」「発句論」が2種、「此木戸や」が1種である。教材の組み合わせの特徴としては、〈発句+「去来抄」〉の要素を含むものが全19種中16種に及び、〈発句+「去来抄」+「三冊子」〉の要素は7種に含まれる。

以上の検証により、「古典B」教科書の俳諧関連教材に共通する傾向として、18種が発句教材を備え、そのうち16種が芭蕉・蕪村・一茶の句を1句以上採録すること、それら18種のうち17種が〈発句教材+俳文教材〉の教材構成を持ち、そのうち16種が〈発句教材+「去来抄」〉の組み合わせを有し、さらにそのうち7種に〈発句+「去来抄」+「三冊子」〉の教材構成が共通することが判明した。

## 2. 発句教材における諸相と課題

発句教材18点の共通点として、最も顕著なのは、芭蕉の句を必ず採録していることである。発句教材を設けないA<sub>1</sub>が、唯一の俳諧関連教材として配置するのが「おくのほそ道」であることと併せて、「古典B」教科書教材における芭蕉作品の教材化は必須であるといえる。芭蕉の句のみ、蕪村の句のみでそれぞれ教材化したA<sub>2</sub>、「おくのほそ道」所収の芭蕉と曾良の句の抜粋であるC<sub>2</sub>・D<sub>3</sub>も含め、芭蕉（「おくのほそ道」のみ曾良も付随）・蕪村・一茶の三者いずれかの句のみで構成された教材を、仮に〈芭蕉・蕪村・一茶型〉と呼び、発句教材の別のパターンとして、複数名の作者の句によって構成された教材を〈複数名型〉と呼ぶならば、この型のうち、芭蕉・蕪村・一茶の句のみ2句以上採録するB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・Eは、いわば〈芭蕉・蕪村・一茶重視複数名型〉であり、〈芭蕉・蕪村・一茶型〉と〈複数名型〉との中間的な要素を持つものとして位置づけられる。〈芭蕉・蕪村・一茶型〉と〈複数名型〉の関係性として特筆すべきは、〈複数名型〉が全て、芭蕉・蕪村・一茶の句を採録していることである。すなわち、芭蕉のみ、蕪村のみ、芭蕉と曾良のみ、のように作者を特定した教材化が成立する代わりに、芭蕉・蕪村・一茶を抜きにした〈複数名型〉の教材化は見られず、多数の作者を取り上げる教材観においても、それら三者は不可欠の存在とみなされていることが分かる。その他の〈複数名型〉及び〈芭蕉・蕪村・一茶重視複数名型〉7点の共通点としては、松永貞徳・西山宗因・向井去来・服部嵐雪の句を必ず含むことが挙げられる。Gのみは、1句めから順に、山崎宗鑑・荒木田守武・貞徳・宗因という配列であるが、その他6点は貞徳から始まり宗因に続き、芭蕉・蕪門俳人・蕪村を経て、7点とも一茶の句が末尾に置かれることから、概ね〈複数名型〉において、貞門・談林から一茶までを採録の射程とし、蕪門俳人を複数取り上げ、編年的に配列する教材観が共通するといえる。

この編年の配列については、〈芭蕉・蕪村・一茶型〉のうち三者の句とも採録する教材でも同様であり、9点全てが芭蕉の句から始まり、蕪村・一茶の順に作者ごとの句の配列が行われている。さらに、句の成立年が明らかなものの多い芭蕉の例を挙げれば、芭蕉の句を複数教材化した13点のうち、9点で成立年の早い順から句が並べられている。その他の4点のうち、3点は作者ごとの句を春夏秋冬の順に配列しているが、作者が芭蕉・蕪村・一茶の順である以上、やはり編年の配列の影響下にあることは否めない。例えば、それらが文学史的観点の反映を暗に意図しているとしても、選ばれた句の相関性において、編年の配列が何らかの学習効果を積極的に設定され、かつ教材中に明示されているのでなければ、文学全集を模した配列法は意義に乏しい。このような成立年偏重の教材化は、注釈に対する教材観にも影響し、芭蕉の句を編年的に配列した9点のうち、3点では芭蕉の全ての句の注釈に成立年が記され、3点ともに句に用いられた語に関する注釈がないまま、成立年だけを記すものが複数含まれている。何年に詠まれた句かという文学史的情報は、そのことが句の内容に関わる場合以外、読解における優先性は低い。発句教材の注釈には、語義以外にも、句の成立年や、成立場所、出典等多

様な観点が濫立し、ひいては語義の解説もないまま、各作者の職業だけを記す例<sup>8</sup>まで見られるが、学習者が句を鑑賞するうえで、真に必要な解説を備えた注釈の充実が望まれる。

全発句教材に共通の配列法として、1句ずつ等間隔に配置する形式が一致しているが、各句を同条件のもとに配列することの教材化における有効性については再考を要する。1句ずつをただ継ぎはぎした名句選のような本文に対して、必要な語注も整わない状態では、学習者の鑑賞を保障しているとは言い難い。発句を読むということは、他の教材と同じく言葉を読むということである以上、まずは各句に含まれる「古典B」の学習者にとっての難解語句を予想し、補うのが教材化の原則である。さらに、日本における最も短い文学形式としての象徴性の高さによって、発句には他の教材に対する場合とは種を異にする留意が求められる。栗山理一は、句の「取合せ」に関する叙述<sup>9</sup>において、言語の不完全性についてこのように述べている。

もとより取合せによる方法も、対象の本情を捉えて形象するためのものである。対象をそのものとして直叙するのではなく、他の物を借り、それとの照応において対象の真を形象化する方法を選んだのは、対象を物象連環の姿において把握することにほかならない。すべて物は孤立して存在するのではなく、つねに他との連関において存在するとすれば、二物の照応によってその実在感を確かめ、あるいはその紐帯を明らかにすることにもなる。このような方法は豊かな想像力に依存することでもあるが、一つには詩的表現の媒体となる言語が不完全なためでもある。言語は音楽における楽音や絵画における色や線のように抽象されたものとしての純粋な対応物を持ちえない。音と意味との完全な協和としての純粋言語は存在しがたく、たえず誤解や不確定な言語表象を伴ってくる。したがって詩的表現はそれ自体として過不足のない伝達を保証することは困難であるため、想像力の助けを借りて表現効果の確率を高めようとする。取合せも、いわば想像力に補償を求める俳諧固有の方法と考えることもできよう。

発句教材の原点は、発句と学習者との静かなる対峙にある。栗山の言う「誤解や不確定な言語表象」は、とりもなおさず発句ならではの象徴性の極限への可能性を秘めるものでもあり、「想像力の助けを借りて表現効果の確率を高めようとする」営みを辿ることこそ、発句固有の学習内容であるといえる。ところが、学習者の鑑賞を支えるために不可欠であるはずのものが削ぎ落された教材が、「古典B」教科書には往々にして存在するという問題が、各教材の検証によって判明した。それは、前書の欠如である。

「すべて前書は其の詩歌俳句の序なり、序は緒なり、其の因つて起れる所以を記せるものなれば、取離してはならぬものなり。解も亦前書あるものは前書を忘れて之に因るべきなり。」と幸田露伴も述べる<sup>10</sup>とおり、前書が付された句であれば、両者を備えた形での鑑賞が必須である。栗山理一も、「たとえば、発句にはしばしば「前書」が添えられることがある。あるいは紀行などでは前文を前提として発句を解しようとする。この前書は多かれ少なかれ句の生まれた時の主体や客体の条件を示してくれるものであ

る。この場合、句に前書が必要と感じられるのは、その句の正しい享受のためには前書に指示された「場」を理解することを要求しているといつてよからう。前書なしには誤解を招くか、あるいは不十分な享受に終わることへの虞れを作者が感じているからに外ならない。もとより前書のない作品は数多くある。その場合、前書を必要としないということは、その句の生まれた「場」が一応享受者にも理解されるとの默契があるか、あるいはその「場」が享受者に誤解をもたらすような特殊性をもっていない場合か、または作品の性質そのものが「場」に依存する度合いの少ない場合かななどであろう。」<sup>11</sup>として、作者が享受者に望む「場」の理解における前書の必然性を説いている。

例えば、発句教材7点が採録する「堅田にて<sup>12</sup> 病馬の夜さむに落て旅ね哉」の場合、井本農一が、「なお、近江八景の一つである「堅田落雁」が、この句と全く無関係だとはいいきれないであろう。芭蕉が『猿蓑』にこの句を入れるに際して、「堅田にて」と前書を付した気持の中に、それがなかったとはいえまい。それでなければ、「堅田にて」という前書をこの句に付けて『猿蓑』に入れなければならない理由はあまりないからである。」<sup>13</sup>とするのは、栗山の言う「場」の共有を享受者にもたらす目的を認める所以である。さらに例を挙げれば、4点が採録する「裏店に住居して 涼風の曲りくねつて来たりけり」は、前書なしに句意を理解することは困難であろう。丸山一彦によれば、初案は「涼風の横すぢかひに入る家哉」であったという<sup>14</sup>が、この句には「家」の語があるため、涼風の届く「場」を享受することはたやすいものの、状況説明が理に落ちて興趣に乏しい。「涼風の曲りくねつて来たりけり」は、その状況をあえて前書に出すことで、機知のみを凝縮させる句作に成功した代わりに、前書による状況把握が必至となっている。ところが、これらの句を採録する教材のうち、前者は1点、後者は2点が前書を省いているのである。

「古典B」教科書所収の発句教材のうち、「おくのほそ道」の句の抜粋である2点を除く18点中、前書を完備するものは僅か7点であり、〈複数名型〉及び〈芭蕉・蕪村・一茶重視複数名型〉7点全てに前書がない。この実態は、多数の作者の句を採録する教材に、より名句選的教材観が濃厚であることを意味する。しかし、小学3年に始まり、中学・「国語総合」と繰り返される発句の学習の終着点として、オリジナルの全貌を示さないのは、学習者の鑑賞の妨げとなることはもとより、「伝統的な言語文化の学習」のうえでも大いなる不足を免れない。

このような前書欠如の教材化は、前述した編年の配列、注釈の不備、1句ずつの継ぎはぎ等と決して無縁ではなく、むしろ、「形骸的教材観」という一語に集約されるものである。教材観を色濃く反映する学習課題について検証すると、発句教材全20点中季語を指摘させるものは17点と大半であり、さらに切字（句切れも含む）も指摘させるものは8点ある。そのうち10点は単に指摘させるだけの課題であり、「季節ごとに句を分類する」「季語の役割について整理する」「表現上の効果を考える」という発展的要素を含むものもあるが、季語の分類や整理に企図した学習内容と「読むこと」の学習との関連性が不分明で、「表現上の効果」という指示も雑駁である。発句に季語や切字が求

められる前提があるにせよ、その指摘を学習者に委ねるのではなく、各句の季語や切字に正しい注釈を予め付すほうが、より学習者の鑑賞に寄与することだろう。

栗山理一は、「竹 木因亭 降ずとも竹植る日は蓑と笠」の句から新たに「竹植る日」が季語と認められたことに触れ、このように述べる<sup>15</sup>。

「竹植る日」は芭蕉が新しく定めた季語であると記録されているが、その他にも彼此前後を対照してみれば、芭蕉の発見した季語はかなりの数に達するであろう。このような季語の成立の条件としては、和歌以来の事物の本意観を前提とし、これに対応する生活の秩序が組み合わされて生まれたものと考えられる。しかも特筆すべきことは、芭蕉は季語を題として句を発想したのではなく、事物の本意を把握することによって触発された作者の情動の世界を句の題としたのであり、季語はその情動の世界を形象化するための最も有効な媒介として用いられている、という点である。そのような媒介としての季語を目的にすりかえてしまったのが、いわゆる季題趣味ということになる。

季語・季節・切字を指摘させる形式的な発問が、季題趣味に堕し、教材としての「本意」を放擲した「形骸的教材観」の典型であるならば、同じく学習課題において、「芭蕉・蕪村・一茶の句を読んで、それぞれの俳句の特徴を考えてみよう。」(C1)のような作者の句風を比較させる発問もまた、その不成立性において極めて形骸的である。〈芭蕉・蕪村・一茶型〉11点のうち、9点が同様の学習課題を掲載しているが、各作者最少4句、最多でも10句しか採録されない教材において、いかにしてその作者の句風を規定できるといえるのか。そもそも、各作者の句風は一定でもなく、また、仮に教材内の採録句のみに共通する特徴があったにせよ、任意の句による恣意的な評価は意味をなさない。〈芭蕉・蕪村・一茶型〉の、三者の句のみに限定した教材観に瑕疵はない。教科書教材として近世の発句の全てを採録し得ない以上、何らかの取捨選択は必至である。しかし、まるで三者の句風の比較が可能かつ有効であるかのような学習課題を掲載するとき、その教材は、1句ごとに教材化の要点を設定しないままに、「芭蕉・蕪村・一茶」というハイブランドのイメージに依存して、有名句を羅列するような「形骸的教材観」の所産であることを露呈するのである。

「文芸一般についていえることであるが、特に俳諧の場合は特別な場が要求されてくる。それは作者が同時に享受者であり、享受者が同時に作者であるという連衆意識が前提となるからである。俳諧の連句は独吟を例外とすれば共同制作であり、したがってそこには共通の知識や発想法を前提条件とすることなしには成り立たない。独吟といえども、その発想には自己以外の複数の作者を意識の内部に仮定しなければ単調な運びに終わることになる。連句の立句として詠まれる発句のほかに、独立して詠まれる発句もある。その場合でも独自の意識とともに連衆を享受者として予想する意識は全く否定されているのではない。二つの意識はつねに重なり合ったものと解すべきであろう。」<sup>16</sup>と栗山理一の述べるとおり、座の文芸であり、連衆あつての文学である連句を率いる立句だけでなく、地発句もまた、見えない連衆と無限の連句とを引き連れている。発句が一



行詩と決定的に異なるのは、そのためである。「古典B」教科書教材が、発句学習の終着点となるには、学習者が座の文芸としての連衆の存在とともに生々流転する発句の姿を認識するための教材化が求められる。ひとつの発句を、その句の別案、その句を含む俳文、同じ作者の別の句、影響関係にある他の作者の句、俳論、鑑賞文等、様々な作品が取り巻いている。「古典B」の学習者には、一句を織りなす言葉そのものに着目した鑑賞ののちに、その句にまつわる種々の文芸にも触れることで、言語表現と伝統的な言語文化を、普遍性と特殊性の両面から学ぶ教材がふさわしい。

現行の「古典B」教科書教材は、1句ごとの教材性に沿う柔軟性や多様性に乏しいが、例えば、その句に別案があった場合には、それらを並置して比較することで、句の成立に至る言語表現の工夫を考える教材化も有効であろう。5点が採録する「所思 此道や行人なしに秋の暮」には、「秋暮 この道を行人なしに秋の暮」や、「人声や此道かへる（秋の暮）」とする別案<sup>17</sup>があった。小学校・中学校・「国語総合」教科書教材にも採録の多い「閑さや岩にしみ入蟬の声」は現行の「古典B」教科書では1点しか採録していないが、「立石寺 山寺や石にしみつく蟬の声」の初案があった<sup>18</sup>ことを併せて学べば、重複して学習してきた経験に「古典B」ならではの深化が与えられ、学習指導要領の求める「小学校、中学校及び「国語総合」と一貫して育成してきた古典への関心を一層深め、それによって自己の内面を見つめ発展させ、人生をより豊かにしていこうとする態度を育成する」（「古典B」「2目標」）教材化も可能である。

また、学習指導要領「第6 古典B」「3 内容の取扱い」の「(4)「ア」の「言語文化の変遷」について、同解説は「俳諧の学習においてその成立に至るまでの和歌、連歌の歴史を通観したりというように、読むことの学習と関連して言語文化の変遷について理解を深める」とし、「イ」に「必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができること。」とあるが、これらに該当するものとしては、独立したコラムの形で解説は5種にしかなく、そのうち俳諧・発句に関するものは1種のみであり、あとの4種が設けるのは前掲の学習指導要領解説の字義通りの連歌を中心とした文学史で、肝心の俳諧・発句について詳説する前段階で筆を擱いている。コラムに準ずる形として、俳諧の歴史に触れたリード文を置いたり、連句の説明の中に俳諧史について触れたりする教材も5点あるが、いずれも文学史の概説にとどまり、発句教材の読解への寄与には満たない。とりわけ〈複数名型〉の発句教材の場合、採録した句の時代を包括する俳諧史の丁寧な解説が必要であり、〈芭蕉・蕪村・一茶型〉であっても、それらの作者の誕生と影響関係にまつわる詳説があれば、発句教材への理解が深められよう。

さらに、近世俳諧に関する近代以降の文章については、全種ともに教材化がなされていないが、芭蕉・蕪村・一茶だけでなく、その他の近世俳人の作品についても言説を残した文学者は数多く、小説、随筆、句解等、教材化のための素材には事欠かない。とりわけ教科書教材に採録される機会の多い、芥川龍之介、正岡子規、萩原朔太郎等による文章を、近世俳諧関連教材の一環として取り上げ、発句教材と併せて教材化すれば、発

句の読解を深めるだけでなく、文学者たちそれぞれの享受者としての姿に触れることにもつながり、学習指導要領「第6 古典B」「2 内容」「(1)」「エ 古典の内容や表現の特色を理解して読み味わい、作品の価値について考察すること。」を、より効果的に実現することだろう。

例えば、3点が採録する「凧きのふの空のありどころ」について、萩原朔太郎はこのように評釈する<sup>19</sup>。

北風の吹く冬の空に、凧が一つ揚つて居る。その同じ冬の空に、昨日もまた凧が揚つて居た。蕭條とした冬の季節。凍つた鈍い日ざしの中を、悲しく叫んで吹きまく風。硝子のやうに冷たい青空。その青空の上に浮んで、昨日も今日も、さびしい一つの凧が揚つて居る。飄々として唸りながら、無限に高く、穹窿の上で悲しみながら、いつも一つの遠い追憶が漂つて居る！

ここに描かれるのは、蕪村の句を契機とする朔太郎の心象であり、蕪村がモチーフとした凧は、鶏が鳴く「さむしい田舎の自然」<sup>20</sup>や、「さびしい風船はまつすぐに昇つてゆ」<sup>21</sup>く波止場があり、「動物は恐れにふるへ／なにかの夢魔におびやかされ／かなしく青ざめて吠えてゐ」<sup>22</sup>る、朔太郎の詩的世界に浮んでいる。学習者が、自らの鑑賞行為のちに、このような発句が生み出す新たな文学性の発露に触れる教材があれば、「伝統的な言語文化の学習」の要件を満たしつつ、自らの心象を客体化したうえで、他者の心象と比較し、その軸となる発句の強靱さを発見するところまで、「古典B」教科書における俳諧関連教材の射程を定めることが可能になるのである。

### 3. 俳諧関連教材の配置における諸相と課題

現行の「古典B」教科書の構成上の共通点として、全種が二部仕立て<sup>23</sup>を採用している。そのうち、俳諧関連教材の配置は、単一の教材のみである〈単一型〉を除き、全ての教材を一単元にまとめ、いずれかの部に配置する〈一括型〉、発句教材と俳文教材の組み合わせで一単元を構成し、かつ「評論」の語を冠した別単元にも俳文教材を配置する〈一括・別単元併存型〉、発句教材と俳文教材とを同一単元化せず、「評論」として別単元に含めた俳文教材を異なる部に配置する〈評論該当教材別単元・別部型〉に分類できる。それらの配置について、教材の文学形式及び出典別に教科書の第一部・第二部ごとに分類し、〈表2〉に示した。各型の教科書の列は、上から教材数の多い順に並べ、発句・連句・俳文<sup>(24)</sup>・評論に分け、発句は〈芭蕉・蕪村・一茶型〉を「●」、〈芭蕉・蕪村・一茶重視複数名型〉を「▲」、〈複数名型〉を「△」で表わし、連句・俳文は「去来抄」を「去」、「三冊子」を「三」等、「1. 俳諧関連教材の種類と分布」で示した教材名の最初の一字によって表わし、同一出典の教材が複数ある場合は「去②」のようにその数を示している。

〈単一型〉の2種を除く17種のうち、俳諧関連教材を一単元に集約する〈一括型〉は3種しかないのに対し、〈発句教材+俳文教材〉の単元化を図りつつも、俳文を「評論」

〈表2〉「古典B」教科書における近世俳諧関連教材の配置形式

配置形式		第一部				第二部				評論			教材数
		発句	連句	俳文	評論	発句	連句	俳文	去	三	柴		
一括	A2					●●		野・笈・月・歳・去③・三②				11	
	D3					●		去①・漁				3	
	F2	●		去①								2	
一括・別单元	H	●		野・お				北・鶉・去②		1		8	
	F1	●		去③						1		5	
	B1	▲		笈					2			4	
	B2	▲		野					2			4	
	C1	●		去②						1		4	
	G	△		奥③	去②					1		7	
	D1	●	市					笈	1	1		5	
評論該当教材別单元・別部	I1	△						お	3			5	
	I2	△						お	3			5	
	E	▲							2	1		4	
	J1	●	市						1		1	4	
	J2	●	市						1		1	4	
	C2	●				●			1			3	
	D2	●								1		2	
単一	A1			奥④								4	
	I3					△						1	

单元にも配置する〈一括・別单元併存型〉や、発句教材（3種は連句教材も併存）と俳文教材を同一单元に収めず、別部の「評論」单元内に配置する〈評論該当教材別单元・別部型〉に見られるような、俳文の一部を「評論」扱いして切り離す編集方針を持つ教科書は14種ある。すなわち、「1. 俳諧関連教材の種類と分布」で述べたとおり、〈発句教材+俳文教材〉の教材構成を備える教科書は17種あり、そのうち16種は〈発句+「去来抄」〉の組み合わせを内包しているが、それら16種のうち、発句教材と「去来抄」を一单元とする編集方針を持つものは5種のみであり、「去来抄」を発句教材と分断する観点を持つ教科書の方が大勢を占めるとともに、「三冊子」についても、採録する8種中7種が、「評論」单元に含めている。さらに、第一部の「評論」单元に俳文教材を置くのは1種のみであり、「去来抄」「三冊子」を「評論」单元に含める教科書の大半は、それを第二部に配置している。以上の検証から、「古典B」教科書においては、発句教材を第一部、「評論」单元を第二部に設け、発句教材と分断して「去来抄」「三冊子」を配置する編集方針が多く見られることが判明した。

このような俳諧関連教材における発句教材と俳文教材の分断的配置法は、それらの教材価値を著しく損なうものとして、再考が望まれる。とりわけ「去来抄」の発句教材への教材的寄与は、单元と部を離れては実現しがたい。「去来抄」の文学的価値について、南信一が「一章一章が独立していて、殆んどが前後の章との脈絡がないこと、程よい長

さであること、簡潔な筆づかいであること、しかも対話体で書かれていることなど、読者はあたかも傍聴者の如き立場で読むことが出来、興味と滋味とは津々として尽きる所がない。』<sup>25</sup>と述べる、対話形式がもたらす読者への「場」の再現性は、「伝統的な言語文化の学習」に資する点で、高い教材価値を有している。「三冊子」が、同じく「先師曰く」として芭蕉の教義を伝えながらも、それらを自らの語りの文脈に取り込み、語りの地平の一体化による師説の敷衍を選んだのに対し、「去来抄」は、エピソードの活写に心を配り、読者がまるで蕉門の一員としてその場に居合わせたかのような再現性の獲得による、読者の連衆化を企図したのである。「古典B」の学習者は、「去来抄」に描かれた発句にまつわる挿話を通して、連衆の文学としての発句の成立に立ち会い、言語文化の生成の過程そのものに触れられるだけでなく、芭蕉や蕉門俳人の抱き続けた言語文化への強烈なまでの執心や、真摯な態度を窺い知るとともに、師弟関係に基づく俳諧観の応酬からは、「伝統的な言語文化の学習」のモデルをも学習できるのである。

「去来抄」を教材化する16種のうち14種が採録する「行く春を」や、9種が採録する「岩鼻や」は、いわば定番化された章段であり、その2段のみで「去来抄」の教材を構成するものも6種あるが、その他の「うづくまる」「此木戸や」「下京や」「発句論」の章段のみならず、「去来抄」固有の教材価値のもと、別章段の教材化も含めた充実を図れば、「古典B」における俳諧関連教材群への貢献はより高まる。例えば、「行く春を」「下京や」の句は「猿蓑」に入集しているが、撰集時のエピソードとして「此木戸や」の章段に著わされた、発句の一字をも疎かにせず、版木を改めさせても句を守り抜く芭蕉の理念とともに、撰者である凡兆・去来にもまた各自の観点があり、それらの応酬の先に一つの句集が編み上げられる様子に着目し、「猿蓑」撰集という共通項を設けて連続的に教材化すれば、連衆の文学としての発句のありようへの学習者の意識を高め、3種が教材化する「猿蓑」所収の連句「市中の巻」への発展的学習をも円滑にする。さらに、「行く春を」の章段で問題となる「ふる・ふらぬ」の論については、「先師評」所収の「つかみあふ子どものたけや麦畠」から始まる「凡兆曰く「この「麦畠」は「麻畠」ともふらん」。去来曰く「麦は麻になりても、よもぎになりても、苦しからず。」と論ず。先師曰く「また、ふる・ふらぬの論かしがまし」と、制し給ふなり。見る人、察せよ。」という短い章段を併せて教材化すれば、「ふる・ふらぬ」の論難が頻繁に横行した背景である発句の17文字による限定性という言語表現上の特徴だけでなく、「ふる・ふらぬ」に終始する愚かさを諷める芭蕉の俳諧観の高みを顕在化し、それを「行く春を」の章段の読解へと還元することもでき、かつ、発展途上の学習者としての去来・凡兆の未熟さを、指導者としての芭蕉は一喝しながらも、決して威容を誇るのではなく、むしろ去来・凡兆ともども叱られる姿はユーモラスでさえあるところに、俳文としての共感を覚えることもできるだろう。また、発句教材との関連付けとしては、例えば7点が採録する「堅田にて 病馬の夜さむに落て旅ね哉」の読解を深めるものとして、「猿蓑」でこの句の次に並ぶ「(堅田にて) 海士の屋は小海老にまじるとゞ哉」を巡る「先師評」所収の章段を併せて学べば、「猿蓑」撰集時の挿話としてはもとより、弟子である去来・

凡兆と師である芭蕉との応酬から、発句への三者三様の観点を読み取ることができ、学習者自身のこの発句に対する鑑賞を問い直す契機ともなる。南信一が挙げた章段の独立性と短さ、筆致の簡潔さ、対話形式による場面の活写等の「去来抄」の美点は、とりもなおさず、俳文教材としての教材価値でもあり、「評論」という近代以降の文学史観に基づくカテゴリーではおよそ覆い尽くせないほどの「興趣と滋味とは津々として尽きる所がない」豊かさを備えている。しかし、その多層的な教材価値をじゅうぶんに発揮するためには、発句教材と俳文教材を統一して「教材群」化し、各教材に横断的見地を付加した「教材群観」の設定が不可欠なのである。

## おわりに

現行の「古典B」教科書全種における近世俳諧関連教材の検証により、発句教材に見出された「形骸的教材観」は、「去来抄」や「三冊子」等を別部の「評論」単元に収めて発句教材と分断する教材配置にも及んでいない。学習指導要領が「古典B」に求める「言語文化の変遷について理解を深める学習に資する」教材について、同解説は「『古典B』では、文章の種類や類型、形態に偏りなく、幅広い範囲で教材を取り上げ、古典の多様な世界に触れさせる」とし、「古典を読む能力を養うためには、生徒の発達の段階や指導の時期に即応して、長短難易様々なものをバランスよく取り上げ、その配列を工夫するなどの配慮が必要である。」としているが、教材の「配列を工夫する」ためには、教材ごとに閉じられた教材観だけでなく、各教材を包括する「教材群」としての学習内容を予め設定した「教材群観」の発想が背景になければなるまい。俳諧という言葉文化の性質を鑑みれば、近世俳諧関連教材の一括配置による「教材群」化は必至であり、さらに、それらの教材が単なる羅列にとどまらず、有機的に結びつき、互いに学習効果を高めあう「動態的教材群観」のもとに選択されてこそ、「伝統的な言語文化の学習」に寄与するものとなるのである。

A2による芭蕉・蕪村関連限定の教材群は、一括配置の条件を満たすのみならず、11点という最多の教材数に加え、他社にはない蕪村の俳文を2篇教材化する一方で、小林一茶を切り捨て、芭蕉・蕪村・一茶の三俳人による文学史的教材観を脱却した点で画期的であり、現行の「古典B」教科書のうちで、唯一「動態的教材群観」の萌芽を示すものである。しかし、例えば、芭蕉を思慕し、蕉門俳諧復興に奔走した蕪村の、芭蕉に寄せる憧憬と、俗世に生きる自身への忸怩たる心境とを吐露した「歳末弁」を教材化しながら、蕪村から芭蕉への鮮やかなはずのベクトルは、教材の底辺に沈潜したままであり、教材間の横断的見地を前提とした「動態的教材群観」には未だ遠い。

「伝統的な言語文化の学習」とは、伝統文化を対象とするだけで叶うものでもなく、文意の把握や、言語文化に関する知識の、文学史的及び文法的習得に終わるものでもない。「動態」としての学習が保証されなければ、伝統を捕縛したことにはならないのである。伝統的な言語文化の絶え間ない潮流の中から、或るムーヴメントを焦点化し、そ

の齎くありさまを感じ取れるような教材構成による「教材群観」が、これからの「古典 B」の教科書編集には求められている。近代以降の文学史観を徒に踏襲したジャンル別の作品集のような旧態依然とした教科書は、いわば文化遺産の標本箱であり、その目次から既に冷たさが伝わってくる。「伝統的な言語文化の学習」を反映した「教材群観」に基づく近世俳諧関連教材を、<sup>スタティック</sup> 静 態を捨て、<sup>ダイナミック</sup> 動 態を希求する教科書編集の旗幟として掲げたい。

## 注

1. 本稿で取り扱う近世俳諧関連教材とは、韻文である発句・連句及び散文である俳文等、近世において俳人としての経歴を持つ作者による作品を教材化したものを指す。
2. 例えば、小学校では、3年の教科書において5社5種全てが俳句教材を配置し、それらの全てが近世の発句を含む。中学校では、3年の教科書において5社5種全てが、また高等学校では、「国語総合」教科書において9社23種のうち9社20種が、それぞれ「おくのほそ道」を教材化している。
3. 現行の「古典A」教科書のうち、近世俳諧関連教材を配置するのは、「おくのほそ道」の句の抜粋を教材化する1種のみである。
4. 本稿で取り扱う近世俳諧作品の作品名及び本文は、それぞれの参照元の表記に従い引用するものとするが、作品名に付した括弧については、便宜上一重鍵括弧に統一する。各作品の参照元は、発句については、芭蕉のみ『新編日本古典文学全集70 松尾芭蕉集①』（非本農一・堀信夫注解 小学館 1995年7月）、その他の作者は『新編日本古典文学全集72 近世俳句俳文集』（雲英末雄・山下一海・丸山一彦・松尾靖秋校注・訳 小学館 2001年3月）であり、連句「市中は」の巻については、『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』（非本農一・久富哲雄・村松友次・堀切実校注・訳 小学館 1997年9月）、散文については、「野ざらし紀行」「笈の小文」「許六離別の詞（教材名「柴門の辞」）」が『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』（非本農一・久富哲雄・村松友次・堀切実校注・訳 小学館 1997年9月）、「おくのほそ道」が『日本古典文学全集41 松尾芭蕉集』（非本農一・堀信夫・村松友次校注・訳 小学館 1972年6月）、「去来抄」「三冊子」が『新編日本古典文学全集88 連歌論集 能楽論集 俳論集』（奥田勲・表章・堀切実・復本一郎校注・訳 小学館 2001年9月）、「おらが春」「鶉衣」「月夜の卯兵衛」「歳末弁」「北野老仙をいたむ（俳詩）」が『新編日本古典文学全集72 近世俳句俳文集』（雲英末雄・山下一海・丸山一彦・松尾靖秋校注・訳 小学館 2001年3月）、「俳番（教材名「漁父の利」）」は『一茶全集／第六巻 句文集・撰集・書簡』（丸山一彦・小林計一郎校注 信濃毎日新聞社 1976年11月）である。
5. 「去来抄」の各章段名は、教科書教材に付された題名を転用しているが、「うづくまる薬缶のものゝ寒さかな」から始まる章段についてのみ、教材に題名がないため、仮に「うづくまる」とした。また、表内の他の俳文の出典名も、各教科書教材に基づくため、例えば本文中では「おくのほそ道」と表記しているが、表内では「奥の細道」と記している。ただし、本文中の教材名については、各教科書の表記に従うものとする。
6. これらの教材のうち、C<sub>2</sub>には1句、D<sub>3</sub>には2句、河合曾良の句が含まれているが、芭蕉の俳文からの抜粋であるため、芭蕉を中心とした教材化の一環にあると捉え、同分類に収めた。
7. 本文の引用元である『新編日本古典文学全集71 松尾芭蕉集②』の表記に基づき「くの字点」を用いている。
8. Eの発句教材は13人の句による〈複数名型〉であるが、全16句のうち10句に語注がない代わりに、西鶴・芭蕉・蕪村・一茶を除く9人の俳人名全てに、「松永貞徳（一五七〇～一六五三）連歌師。」「小西来山（一六五四～一七〇六）出自は薬種商。」「加賀千代女（一七〇三～一七七五）出自は加賀の国の表具屋。」のように、生没年と「出自」や職業だけが注記されている。
9. 栗山理一『俳諧の系譜』「芭蕉俳諧の構造と方法」角川書店 1980年5月 pp.166-167
10. 『露伴全集 第二十三巻』「評釋炭俵（夷子講の巻）」岩波書店 1952年2月 p.214
11. 栗山理一『芭蕉の芸術観』「俳諧の詩性」永田書房 1981年6月 pp.165-166

12. 本稿では、引用する発句に前書がある場合、句の前に文字のサイズを小さくした形で記すものとする。
13. 前掲書『新編日本古典文学全集 70 松尾芭蕉集①』 pp.351-352
14. 前掲書『新編日本古典文学全集 72 近世俳句俳文集』 p.387
15. 前掲書『芭蕉の芸術観』「二 発句」 pp.280-281
16. 同書「一 俳諧の詩性」 p.167
17. 前掲書『新編日本古典文学全集 70 松尾芭蕉集①』によれば、「秋暮 この道を行人なしに秋の暮」は、元禄7年9月23日付の意専・土芳宛書簡に見られ、「人声や此道かへる」は、同年9月25日付の曲翠宛書簡に、「此道を行人なしに秋の暮、『人声や此道かへる』共、句作申候」とあるという。
18. 前掲書『新編日本古典文学全集 70 松尾芭蕉集①』では、『曾良書留』に載る「立石寺 山寺や石にしみつく蟬の声」を初案としている。
19. 『萩原朔太郎全集 第七巻』「郷愁の詩人 與謝蕪村」 筑摩書房 1976年10月 p.216
20. 『萩原朔太郎全集 第一巻』詩集「青猫」より「鷄」 筑摩書房 1975年5月 p.164
21. 同書 詩集「青猫」より「憂鬱な風景」 p.180
22. 同書 詩集「青猫」より「遺伝」 p.203
23. 教科書によっては、「第一部・第二部」だけでなく、「古文編Ⅰ・Ⅱ」「前編・後編」「第一章・第二章」のような語も用いられる場合があるが、概念として二部構成であることに異同はないため、本稿では全て「第一部・第二部」に統一する。
24. Hが採録する「北寿老仙をいたむ」は俳詩であるが、便宜上俳文に含めた。
25. 南信一『総釈去来の俳論（下）去来抄』「解題 三、文章」 風間書房 1975年5月 p.13

（にのひら ともあき 熊本大学）